ピアノ界のカリスマ、ベートーヴェンを弾く

「孤高の天才」。このキャッチフレーズが、ここまで合致するアーティストが他にいるだろうか。
その輝かしくも内省的な音色を存分に使った、鋭い分析眼による大胆かつ確信的な音楽に、誰もが圧倒され惹き込まれる。その世界は誰とも似通わない、まさに天才的、そして孤高のものである。
そのカリスマ、ミハイル・プレトニョフがオール・ベートーヴェンで、しかも「超」が付くほどの名ソナタのみで構成されたプログラムで登場するとは、誰が想像したであろうか。
ファンならずとも狂喜乱舞するようなこの演目だが、今回はそれをミューザ川崎で聴けることにも価値がある。世界的なアーティストがこぞって絶賛するミューザ川崎の音響は、実はピアノ・リサイタルでも極上だ。
2,000 人規模のホールであるのに、豊かに響きながら不思議とクリアに聴こえる音列、まるで目の前で弾いているかのように聴こえる最弱音…プレトニョフの真価を聴くのに、これほどうってつけのホールも無い。
これを逃せば次聴けることがあるかも分からない、まさに垂涎のプログラム。
孤高の天才によるベートーヴェン、
大いに期待したい。

photo. Irina Shymchak

ミハイル・プレトニョフ（ピアノ） Mikhail Pletnev , piano

プレトニョフは、ピアニスト、指揮者、作曲家、とそれぞれの分野において並外れた才能を発揮し、世界中の観客を魅了している芸術家である。
1957 年、音楽家の両親のもと、ロシアのアルハンゲリスクに生まれ、幼少の頃から音楽に非凡な才能を示す。カザンで育ち、13 歳で中央音楽院、1974 年モスクワ音楽院に入学。ヤコフ・フリエール、レフ・ヴラセンコに師事した。1978 年、21 歳でチャイコフスキー国際コンクール・ピアノ部門においてゴールド・メダル及び第 1 位を獲得。これにより早くも世界的に認められる存在となった。
驚くべき技巧、深い知性に裏づけられた演奏、完璧にコントロールされた美しい音色で、カリスマ的人気を誇る現代最高のピアニストの一人として活躍。1988 年、ワシントンで開かれた先進国首脳会議で演奏したことが、ミハイル・ゴルバチョフとの関係を築き、その後彼が自由な音楽活動を行う契機ともなった。
1990 年、ロシア内外の個人、会社、財団等の支援によって資金を得、オーケストラ、ロシア・ナショナル管弦楽団 (RNO) を創設。彼の舞台芸術ヴィジョンに賛同して、国内の多くの優れた音楽家たちがこの RNO の始動に参加。そして彼のリーダーシップのもと、RNO は数年のうちに世界有数のオーケストラとして認められるようになった。
客演指揮者としてもロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団、フィルハーモニア管弦楽団をはじめとする数々のオーケストラを指揮。2011 年 2 月 13&14 日にはドレスデン空爆記念日演奏会にてドレスデン国立歌劇場管弦楽団を指揮し、ブラームスの「ドイツ・レクイエム」を演奏した。またボリショイ・オペラにおける「スペードの女王」の指揮で大成功を収めているほか、コンサート形式のオペラ指揮も行っている。
2015 年より東京フィルハーモニー交響楽団の特別客演指揮者に就任。作曲家としては、“Classical Symphony”、ジャズ組曲、ヴィオラ協奏曲、ほか数多くの作品を発表し、近年ではスティーヴン・イッサーリスのために書いたチェロ・ソナタが大成功を収めている。
2022 年、プレトニョフは新たなオーケストラ、ラフマニノフ国際管弦楽団 (RIO) を創設、東西ヨーロッパの優れた音楽家がスロヴァキアのブラティスラヴァに集まり、最初のレコーディングを行った。今後多くのレコーディング・プロジェクトおよびコンサート・ツアーが予定されている。

Mikhail Pletnev plays Beethoven